

神奈川県考古学会

# 考古かながわ

第25号

2002年12月25日

## 平成14年度考古学入門講座案内

### 「学史を語る ～学史を踏まえた最新の研究～」

講座部会

今年には横須賀考古学会の生みの親である赤星直忠先生の生誕百年に当たり、三浦半島各地域で赤星先生に関連した展覧会等の企画が行われております。神奈川県遺跡調査・研究発表会では記念講演として「赤星直忠—偲ばれる研究者の姿勢—」を川上久夫先生にお願いしております。

今回こうした先学の業績を広く会員の方々に紹介するのを目的に、平成14年度の考古学入門講座として、神奈川県内の考古学史を時代毎に各講師の方々に紹介していただこうと企画いたしました。

先学研究者の業績の紹介とともに学史に残る遺跡・遺物の紹介や研究動向の変遷などを紹介することで神奈川県内における考古学研究の発展を辿ることができれば今回の目的が達成されるものと考えております。また、最新の研究成果をも合わせて紹介頂くことができれば、若い研究者への指針にもなると思います。

日時 2003年3月23日（日曜日）

9：30～16：50

会場 神奈川県民サポートセンター2F

横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2

（横浜駅西口）045-312-1121（代）

内容（予定・仮題）

- |       |                    |      |
|-------|--------------------|------|
| 9：00  | 開場                 |      |
| 9：30  | 開会                 |      |
| 9：30  | 開会挨拶               |      |
| 9：40  | 主旨説明・総論            | 岡本孝之 |
|       | 考古学史の考古学           |      |
| 10：25 | 旧石器時代              | 鈴木次郎 |
|       | マンローから月見野、相模野編年の確立 |      |
| 11：10 | 縄文時代1              | 戸田哲也 |
|       | 早期編年の確立と草創期の摘出     |      |
| 11：50 | 休憩（60分）            |      |
| 12：50 | 縄文時代2              | 中村若枝 |
|       | 貝塚研究と集落研究          |      |
| 13：35 | 弥生時代               | 小宮恒雄 |
|       | 環濠集落・拠点集落の提示と克服    |      |
| 14：20 | 古墳時代               | 立花実  |
|       | 横穴墓の分析             |      |
| 15：00 | 休憩（15分）            |      |
| 15：15 | 古代                 | 明石新  |
|       | 官衙・寺院研究の学史         |      |
| 16：00 | 中世                 | 渡辺美彦 |
|       | 板碑・石塔              |      |
| 16：45 | 閉会挨拶               |      |

## 見学会参加記

### 仏法寺跡見学会に参加して

渡辺 美佐子

9月14日、極楽寺駅前に午後1時30分に集合。幸い雨はあがりましたが、肌寒い日でした。駅前で見学会に関する資料をいただき、役員の案内で調査の行われている現場の近くへと移動しました。そこで資料をもとに仏法寺と鎌倉の内で起きた戦についての説明がありました。いよいよ仏法寺跡と言われる所へと出発です。山の上までは足場の悪い少々急な道が続いていました。まず沢山の五輪塔が散乱している所に着きました。この場所についてのお話を伺い、つづいて五合柵遺跡へ移動しました。板碑とそれを支えている様な形で五輪塔の下の部分等が柵形の中に残っていました。この位置から極楽寺の切通しを挟んだ山側には、一升柵遺跡が確認されているとのお話でした。さらに右前方の市内に目を移すと高德院の大仏様が、お土産屋さんの置物のように小さく見えていました。次にかつて霊山公園があったといわれるところでコッホ博士の碑の移設記念碑を見学しました。機会がなければ、ほとんど人の目にふれる事が無いのだろうとの思いがしました。再び山道を仏法寺跡へと向かいました。そこには整然と並んだ礎石と柱穴、柵列の穴、岩盤を掘り込んで造られた“請雨池”と思われる池の跡を見ることが出来ました。海に目を向ければ真正面に和賀江島が見え、反対側には極楽寺の切通し。この地点が中世において、とても重要な場所であったであろうという事が容易に想像されました。山を下り、池跡から出土したという柿経（こけらきょう）をみせていただきました。残りがとても良く、とても美しい字で書かれたものでした。遺物というイメージとはほど遠い、「今現在のものですよ」と言われても納得できる様な鮮明なものでした。

およそ2時間30分位の見学会でしたが、毎日作

業している方達の地道なご苦勞の成果を見せていただきました。また細かい説明をしていただき、見学会に参加して本当に良かったと思えました。もっともっと、こういう機会を設けていただきたいと思います。有り難うございました。

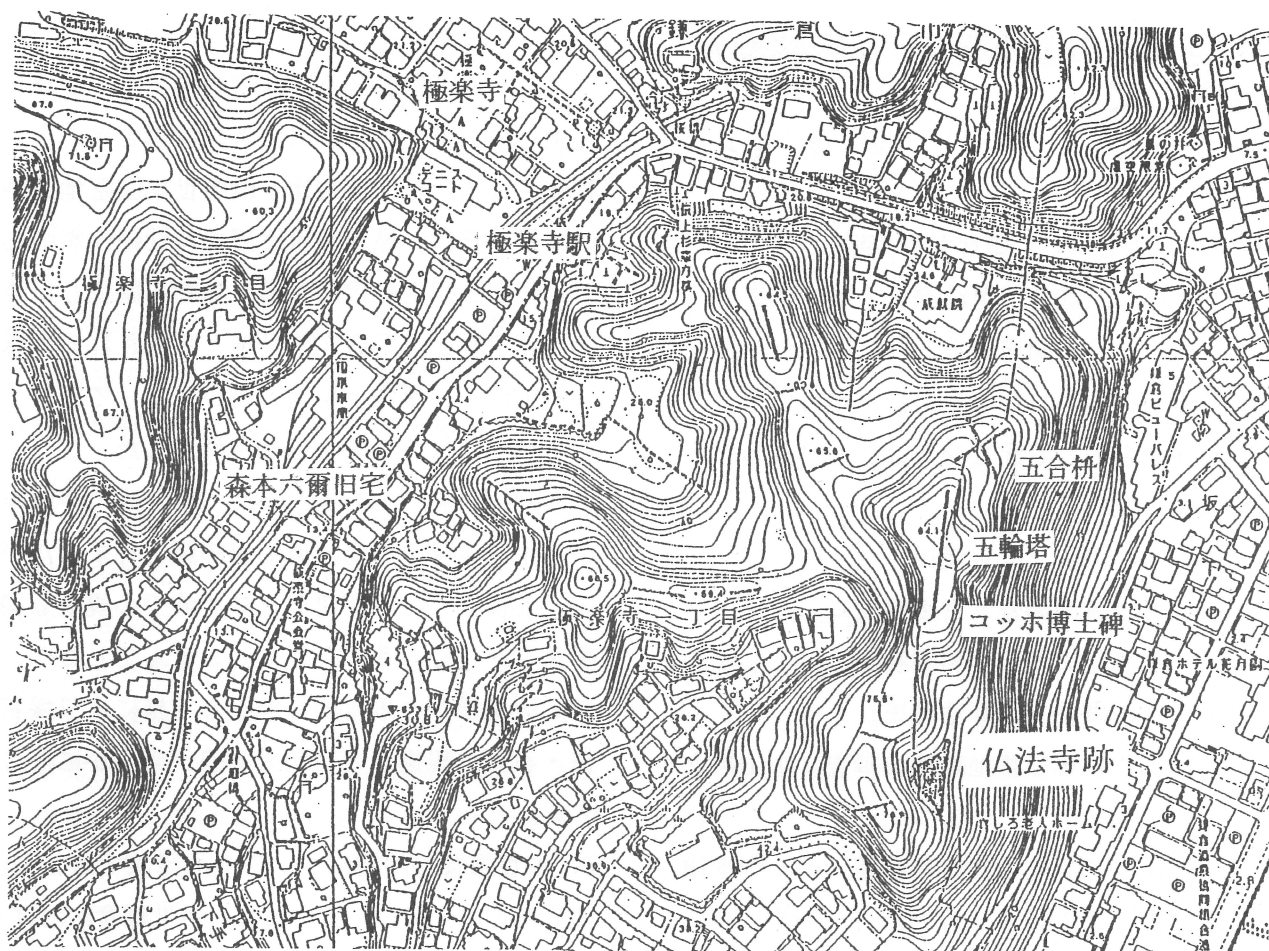


仏法寺跡、雨乞い池から発見された柿経などの発掘成果の見学会に参加しました

安達 澄代

民家を通り、霊山山の頂上まで短いけれど険しい斜面を登りつめると、そこはもう別世界が広がり左手に長谷の大仏様の、その優雅で慈悲深い清い姿に思わず見とれてしまいました。五合柵遺跡での板碑やすでに発掘が終了した釣鐘形の塚などの説明後、仏法寺跡の現場に下り、この地がかつて鎌倉最後の砦、戦の最前線の場所との事、今は跡形もなく静かな山中、眼下に広がる穏やかな海岸線、行き通う車、人々、それら人間の営み、歴史の流れの一時がぐっと迫って来る様な気がし、ここで戦った“もののふ”の苦しい戦い、どんなドラマが展開されたかは知る由もありませんが、むなしい思いや傷みを感じ、建物跡、雨乞いの池の説明を遠く遠く聞いたものです。

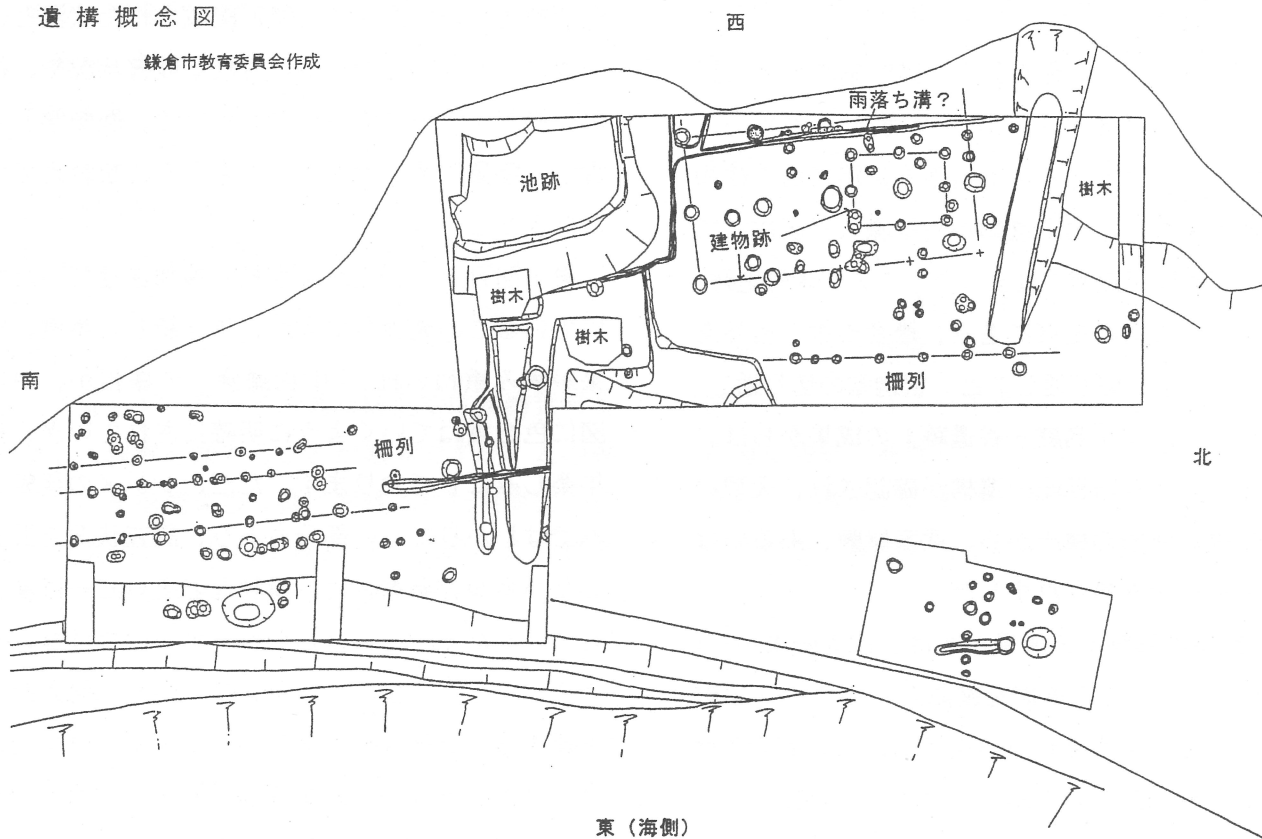
雨乞いが効いたのか小雨が降り出し、雨乞いの池から発見された柿経の一部を拝見し、清々しい木片とそこに書かれた字の黒さが妙に印象的でした。見学会に参加し、歴史の重さ、人間と言うものをあらためて強く感じ、何か胸を張って生きようと大げさですが思いを新たに帰路に着きました。ありがとうございました。



仏法寺跡の位置 (鎌倉市教育委員会提供)

遺構概念図

鎌倉市教育委員会作成



仏法寺跡遺構概念図 (鎌倉市教育委員会提供) (縮尺約300分の1)

## 第12回鎌倉市遺跡調査・研究発表会 に参加して

伊 丹 まどか

2002年8月25日（日）鎌倉生涯学習センターホールにおいて第12回鎌倉市遺跡調査・研究発表会が開催されました。新聞発表などで公開された調査成果の発表も行なわれた事もあり、熱心な考古学ファンが多く参加し盛況な発表会となりました。

調査成果の発表は、

- 1 米町遺跡の調査（熊谷満氏）
- 2 名越ヶ谷遺跡の調査（宮田眞氏）
- 3 北条小町邸跡の調査（馬淵和雄氏）
- 4 亀井砦跡の調査（浜野浩美氏）
- 5 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡の調査（小山裕之氏）の5本と

高橋一樹先生（国立歴史民俗博物館）の「中世鎌倉の地震について」講演が行なわれ、午前10時の開場から、午後4時の閉会に至るまで、熱気に包まれていました。

「米町遺跡」の成果からは、13世紀前半から近世初頭の遺構が確認され、「古東海道」、あるいは「大町大路」と考えられる道路と道路に沿う建物群の検出があり、出土遺物からは職人の居住区であった可能性が指摘されました。この「米町遺跡」で検出された道路を東に進み、鎌倉市中と市外を隔てる「名越の切り通し」と「釈迦堂の切り通し」の間に位置する「名越ヶ谷遺跡」の成果からは、13世紀中葉から14世紀の遺構が確認され、大型の井戸や礎石建物の検出から、武家屋敷、あるいは寺院の存在を指摘されました。

「北条小町邸跡」の成果からは、12世紀末から14世紀前半にわたる遺構を確認し、中でも「小町大路」に直交する幅2mの東西にのびる側溝の検出から、鎌倉市中の町割りだけでなく、嘉禄元年（1225）の新御所移転の位置にも一石を投じる成

果となりました。

また、武家屋敷あるいは庶民の居住する鎌倉の町中とは、景観および居住者の様相を異にすると想像される一帯の「由比ヶ浜中世集団墓地遺跡」の成果からは、砂丘の斜面部で14世紀代を中心に7世紀から14世紀代の遺構・異物を確認し、多くの埋葬遺構と方形堅穴建築址と呼称される倉庫群の検出から、墓域と生活の場が重なって存在していた14世紀代の景観を指摘されました。

「亀井砦跡」の成果からは、弥生時代中期後葉から中世以降の遺構・遺物が確認されましたが、中でも検出した石切遺構は断片的で小規模な調査事例しか、従来報告されていませんでしたが、今回の大規模かつ本格的な調査の実施により採石技法・石材の規模など石切の実態が明らかになりました。

「中世鎌倉の地震について」の講演では、『吾妻鏡』などの文献に記載された、中世鎌倉における、地震の日時、被害状況と、その後の開発、復興状況を教えていただき、文献に記載された状況と、発掘にともなって明らかにされる被害状況や、復興の様相を実地に明らかにしていく、歴史学と考古学の協業作業の大切さ、おもしろさを教えていただきました。

第1回目から、欠かす事無く参加させていただいているこの発表会ですが、年々新しい事例、成果が積み重ねられ、「中世鎌倉」の様相が、白地図に色を重ねていくように明確にされていき、毎年楽しみにしております。ただ、レジメの発表のみではわかりにくい部分もあり、調査状況を撮影したパネル、発掘された遺物などをロビーに展示していただくと、よりわかりやすいのではないかと感じました。また、今年の発表会では何点か発掘調査報告書の販売があり、レジメや、見学会だけでは得られなかった情報を得ることが出来、今後とも続けていただければと思いました。

## 研究会紹介

### 中世瓦研究会

小林 康 幸

昨今の考古学界には、たくさんの研究会があることは、皆さんもよくご存知のことと思います。地域別、時代別、そしてテーマ別にその数は相当数になるものと思われ、まさに研究テーマの数だけ研究会が存在していると言っても過言ではありません。

ここにご紹介する「中世瓦研究会」はその名のとおりに、中世瓦という考古資料の研究によってその時代の寺院などの造営事情や、瓦から窺い知ることのできる生産や流通の問題の解明を目的に平成7年から活動を開始し、今年で結成8年目を迎える研究会です。研究会という名前ではありますが、実質的には関東地方を中心に約20名程の常連メンバーが年1回集まり、各地の瓦を所蔵する機関等を訪問し、瓦の実物を観察し、出土地を訪ね歩くという地道な“勉強会”を行っています。これまでに神奈川（鎌倉）、栃木（足利）、埼玉、群馬、茨城、静岡、東京、千葉の各都県で順次研究会を開催し、おおむね各地で出土している中世瓦については現時点で一定の資料集成をするともに、重要な資料の見学を行ってきました。そして今年去る8月、無謀にも京都への調査旅行を敢行し、平安京の古代末の瓦と宇治平等院の古代・中世瓦を見学しました。

瓦に限らず、考古学の遺物研究では実物資料を観察し、理解を深めることが基本ですが、瓦の場合は特に発掘調査報告書に掲載された実測図、拓本、写真ではなかなか理解が不可能な瓦の質感（胎土、焼成状態）や製作技法を仲間とともに観察することは、共通理解の形成という点で大いに効果的な方法となっています。

多くの研究会では『○△考古』とか『×☆研究』と名の付く会誌を発行して論文を発表したりすることを具体的な活動としている場合がほとんどの

ようですが、我々、中世瓦研究会では残念ながらまだ会誌を持ち合わせていません。資料集は年1回の研究会の都度、報告書の図版を切り貼りし、A3やB4のサイズでコピーを綴じ合わせた手作りのものを作ってきました。資金的に会誌を発行できる程にしっかりした運営基盤がないことも事実ですが、このことは中世瓦研究会が体裁より質的な向上を模索してきた結果であるとメンバー一同、自負しているところです。これまで8年間に積み上げてきた研究の成果は、メンバー各人の手によって着実に各地の中世瓦研究をリードするものとなっています。

近年、山崎信二氏が『中世瓦の研究』を出版し、全国的な規模で中世瓦研究に一石を投じるところとなり、我々も大いに刺激を受けることとなりました。来年は中世瓦研究会も結成10周年を迎えます。これを機会にこれまでの活動を振り返り、その延長線上に今後の展望を模索することを目的として東国の中世瓦研究の到達点をまとめた図書の刊行も検討しています。

神奈川県は今年、生誕100周年を迎える故赤星直忠先生の早くからの業績もあり、まさに「中世瓦研究発祥の地」と言っても過言ではありません。私事で恐縮ですが、学生時代に鎌倉・永福寺跡の発掘調査現場で赤星先生の警咳に接し、中世瓦研究をスタートさせたことを今でも鮮明に記憶しています。先人の業績を学史的に再検証することから解明すべき課題がクローズアップされることも決して少なくはありません。今後とも従来通りの地道な活動を継続し、中世瓦研究を進展させて行きたいと考えています。中世瓦についてお気づきの資料をご存知の方は、どうか気軽に情報をお知らせください。

《連絡先》 〒235-0023

横浜市磯子区森1-14-6-303 小林方  
中世瓦研究会事務局 まで

## 書評

海老名市史叢書8 織 笠 昭 編

### 『海老名をめぐるいにしへの土・時・草・石』

海老名・相模野の理化学的分析資料集成

海老名市 A4版118頁 2002年3月刊

中 村 若 枝

「土、降り積む頃」「時、止まることなし」「草、木、花、萌え出て土となる」「石、人をうごかす」・・・と映像が流れるように説き明かされていく本書は、表題は『海老名をめぐるいにしへの土・時・草・石』サブタイトルには『理化学的分析資料集成』とあります。

表紙を開くと、まず口絵のカラー写真が目にとまります。ここには「先土器時代の石器に使用された代表的石材」がカラーで、27カット掲載されていました。「硬質細粒凝灰岩」とあるものが7カット、「箱根ガラス質黒色安山岩」「利根川ガラス質黒色安山岩」「大洗ガラス質黒色安山」「武子・姿川ガラス質黒色安山岩」各3カット・・・というように、同じ名前の石が複数掲載されています。産地により、少しずつ石の顔が違うということが、一目でわかります。これは石材を見分ける時の参考になりそうです。

本文は、次の4章より構成されていました。

第1章 土層堆積と火山噴出物

第2章 年代測定、

第3章 古環境復元

第4章 石材の産地同定と採集可能地

各章の中で、土壌分析・年代測定・植生など環境を知るための炭化物や珪藻分析・石材の産地同定分析等を取り上げています。つまり、第1章「土」第2章「時」第3章「草」第4章「石」に関係しており、この章だてが「いにしへの土・時・草・石」となっていたのです。「典型となるべき普遍的基準資料とは何か」「埋もれた知らせざる資料をいかに見つけ出すか」そして「そこから導

きだされることは何か」という3つの大きな柱にそって、本書は編まれています。

「理化学的分析集成」とありますが、ただ単に分析結果を集成しただけではなく、考古学の理念から解き明かし、分析方法のしくみを平易に解説しているという点が、本書のもっとも大きな特色ではないかと思います。各章の導入部では編者織笠昭氏が、巧みな筆致で読者を異空間にいざない、それをうけ柴田徹氏・望月明彦氏・辻本崇夫氏・金井慎司氏が具体的な部分をわかりやすさを第一に解説しています。

しかし、理化学的分析報告は、表・グラフが多用されており、専門知識がないとそこにどのような意味があるのか読み取れないものが多いのも事実ではないでしょうか。その点、本書では、科学分析入門の部分にかなりのページがさかれており、分析方法そのもののしくみについて、わかりやすくコンパクトに解説が加えられています。その上で、海老名を中心とした相模野台地の分析結果から知ることができた「いにしへの」が語られています。

ページを繰るうちに、大地の上で暮らしている私たちは、いつの間にか大地に刻まれたさまざまな痕跡、そしてそこから導きだされたデータまで導かれていきます。織笠昭氏はこのデータこそ「人間の日々の暮らしという歴史の中でもっともかけがえのないことの原点を明らかにしてくれる」と説かれています。

「今こそ、人間が自然とどのように共存してきたかを考えるべきである」という氏の視座は、「科学は人のためにあるのだから」という言葉にあらわれているように思われます。理化学分析入門書としても、一読されることをお勧めします。

《申込・問合せ先》1700円（送料1冊340円）

〒243-0434 海老名市上郷476番地の2

海老名市文化会館小ホール4階海老名市教育委員会  
文化財課市史編さん担当046-231-2111（内）85482

## 大倉幕府北遺跡出土の三鱗文銅製品

宮田 眞

はじめに

本頁では鎌倉市西御門2丁目796番1他2筆に所在する大倉幕府北遺跡（遺跡番号193）出土の三鱗文銅製品をご紹介します。

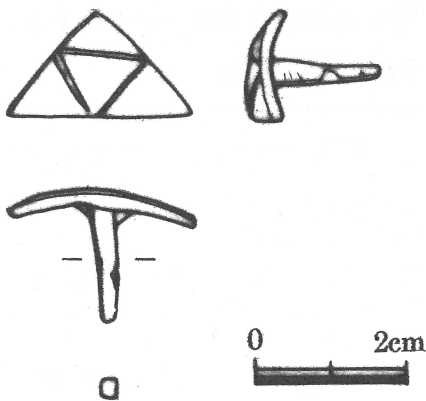
本遺跡は遺跡名が示すごとく、源頼朝が鎌倉入府直後に御所を構えた、所謂「大倉幕府跡」の北方に位置する谷戸内の中ほどにある。

調査の概要

調査からは、13世紀後半～15世紀前葉にかけての複数の遺構面が検出された。今回見つかった主たる遺構は、13世紀後半～14世紀に及ぶ谷戸筋に沿った（南北方向）の道遺溝と、それに付随する溝遺構が挙げられる。道と溝は3次期以上のつくり替えが認められた。溝は谷戸中にもかかわらず、若宮大路の側溝と同様な木製護岸構造を有していた。また14世紀後半～15世紀初頭頃に遺構の様相は一変し、調査区内においては道と溝は完全に埋め立てられ、鎌倉石切石で構築された立派な石垣が築かれる。

今回ご紹介する銅製品は先述の溝覆土（13末～14世紀初頭頃）から検出された

文献 大倉幕府北遺跡発掘調査報告書（2002年6月）



大倉幕府北遺跡出土三鱗文銅製品

## 出土三鱗文銅製品

今回発見された製品は、厚さ1.5mmの銅板を底辺23mm、高さ13mm、側辺が各12.5mmの二等辺三角形に加工して、その内部をたがね様の道具によって、同形均等4分割して三鱗文を意匠している。裏面にはやはり銅製の断面1～3mmの方形、長さ14mmの釘状のものが貼り付けられ鋳の形をしている。全体重量は3.5gを計る。

## 三鱗文に関する遺物の出土例

三鱗文は紛れも無く中世政権都市鎌倉で、長年に亘って権勢を振るった北条氏の家紋である。しかし市内遺跡から現在までにそれに関連する出土遺物は、平瓦凸面や常滑甕胴部などに、三鱗文らしき押印がしばしば認められる以外は、僅かに数例を数えるだけである。

以下に市内の出土例を調査の年度順に列挙する。

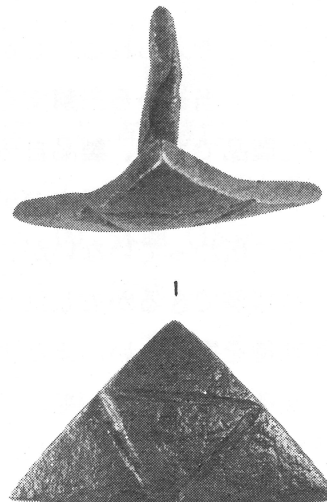
1. 小町カトレアビル用地の夜間調査（1979年9月）

井戸跡からの出土品。曲げ物の底板状をした径22.8cm、厚さ1.5cmの木製円板に、刀子様の刃物によって三鱗文を1箇所刻文。

文献 鎌倉考古No.2（1980年7月）

2. 小町藤内定員邸跡（1979～80年）

砥石の単面に刃先よって三鱗文を刻文。しかし頂部の小三角形の底辺が無いいため、完全な三鱗文とは言えない。



文献 鎌倉考古No.16  
（1982年11月）  
藤内定員邸跡  
遺跡発掘調査報告書  
（1985年2月）

### 3. 諏訪東遺跡 (1981年)

漆器皿の外側面に朱漆で三鱗文を手描きしたもので、形は不揃いで雑な印象を受ける。

文献 鎌倉考古No.16 (1982年11月)

### 4. 若宮大路周辺遺跡群 (鎌倉スポーツクラブ用地) (1992~93年)

鹿角製の管製品 (刷毛の軸か?) の側面部に三鱗文が、刃先によって刻文されており、正位にある内部の三角形が更に同形均等4分割され三鱗文が三つ合体した構図を描いている。この三鱗文は比較的規格性をもつ。

文献 若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 (鎌倉スポーツクラブ用地) (1997年3月)

### 5. 東勝寺跡 (小町3丁目468番2外) (1999年)

糸切底のかわらけ小皿の内底面に、三鱗文が刃先によって刻文されている。規格性に乏しい。

文献 東勝寺跡発掘調査報告書 (2000年10月)

おわりに

以上が、三鱗文関連遺物の市内遺跡からの出土例であるが、鎌倉市において本格的な発掘調査が開始されて30年以上が経とうとしている割には、これはかなり少ない点数と言えよう。

今回の出土品はそうした状況下で得られた貴重な資料で、さらに重要な点は、前例に上げた5点の内、例4. については製作段階から、工人の手によって刻画されたオリジナルな製品と認められるが、他の物は全てが使用者 (素人) の手によって、2次的に加工されたものと考えられる。しかし今回の銅製品は紛れも無く、当初から三鱗文を目的意匠として製作された製品であり、製品自体が三鱗文そのものである。鎌倉時代の三鱗文のデザインの割付はあまり現代に伝わっていないが、これによって多少なりとも理解できるかもしれない。今後の更なる出土に期待を寄せたい。また中世期において三鱗文が、北条氏の家紋として、どう扱われていたかという問題も解明して行かねばなるまい。

### 情報

文化財講演会 古代の役所を発掘する

— (推定) 橘樹郡衙遺跡の発掘調査—

講師 同遺跡発掘調査団主任調査員 河合英夫氏

期日 2003年2月15日 (土) 14:00~15:30

会場 川崎市民ミュージアム映像ホール

問合せ 川崎市教育委員会文化財課

044-200-3305

第20回藤沢市遺跡調査発表会

期日 2003年2月9日 (日) 13:00~16:30

会場 藤沢市民会館小ホール

問合せ 湘南考古学同好会・寺田0466-34-8306

第3回藤沢市遺跡調査速報展

期間 2003年1月21日 (火) ~ 2月9日 (日)

(月曜日休館)

会場 藤沢市民ギャラリー (藤沢ルミネプラザ6F)

問合せ 藤沢市教育委員会生涯学習課文化財担当

0466-25-1111内線5313

企画展「六会の遺跡」

期間 2003年3月29日 (土) ~ 5月9日 (金)

(月曜日休館)

会場 藤沢市民ギャラリー (藤沢ルミネプラザ6F)

問合せ 藤沢市教育委員会生涯学習課博物館準備

担当 0466-46-5106

茅ヶ崎市文化財講演会「高座郡下寺尾寺院跡周辺」

期日 3月8日 (土)

会場 茅ヶ崎市コミュニティホール (市役所別館)

問合せ 茅ヶ崎市教育委員会社会教育課

0467-82-1111

### 考古かながわ 第25号

発行 神奈川県考古学会

発行日 2002年12月25日

編集者 岡本孝之・近藤英夫・安藤文一・  
小林義典・渡辺 務

印刷 (有)湘南グッド

発行者 神奈川県考古学会会長 寺田兼方  
〒251-0043

藤沢市辻堂元町4-17-4 やよい荘102  
郵便振替 00240-9-71208